

「朱雀日記」と『京都名勝記』

— 明治45年谷崎潤一郎の京都ガイドブック —

藤 原 学*

はじめに

1912年（明治45）4月22日午後2時ごろ、谷崎潤一郎（1886-1965）は京都駅に降り立った。「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」両紙に京都見聞録を連載するため、東京に生まれ育った新進作家がはじめて「西京の知を踏¹⁾」んだのだった。上田敏に面会したり、磯田多佳と知遇を得たり、京都在住の「ジレットタント」の面々と知り合い案内をしてもらったりしたことを書いているから、そうした交友関係を中心にこれまでこの旅が取り上げられてきた。しかし新聞連載を約束して訪れるのだから、いくら谷崎に古典文学の素養が備わっていようとも、なんらかのガイドブックを参考にしたとしてもおかしくはない。いやむしろ全く参考にしなかったことのほうが想定しづらいのではないか。もちろんガイドブックといってもこんにち手にするようなものではないであろう。冒頭から結論をいえば、タイトルにあるように『京都名勝記²⁾』を参考にしたことを示すのが、本稿の目的である。平安奠都千百年紀年祭にあわせて編集刊行された『京華要誌³⁾』については、研究もされ注目もされてきたが、その増補改訂版ともいえる『京都名勝記』に関しては存在すら十分に知られていないのではないか。そこで『京都名勝記』の特徴についても簡単にふれる予定である。

1 「朱雀日記」のテキスト

「朱雀日記」は1912年（明治45）年4月27日から5月28日にわたって断続的に19回、「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」に連載された。そのうち、11回分の原稿計45枚が京都府立歴史彩館に所蔵されている（「吉井勇資料2398」）⁴⁾。松屋製と神楽坂山田製のいずれも400字詰原稿用紙およびそれを半切したものにペン、毛筆で執筆されている。

* ふじわら まなぶ 京都大学

松屋は大学ノートを初めて売り出したことで知られている本郷東大前にあった文具店であるから、谷崎は東京から原稿用紙を携えて京都に来ていたのであろう。原稿には連載各回の通し番号と表題が記されているが、初出紙では通し番号のみが掲載され、単行本『悪魔』（1913年1月、靱山書店）収載時にそれらの表題が改めて付された。

現行全集解題には12回分の原稿が所蔵されている旨記されている⁵⁾が、連載第15回「鳳凰堂」（5月24日掲載分）の原稿は京都府立歴史館には所蔵されておらず、また同館には資料紛失の記録もないとのことであるから、全集解題の誤りであろう。一次資料の存在に関わることであるから、特に記しておく。

「朱雀日記」連載全19回のうち、第13回「大極殿趾」原稿の翻刻を以下に示す⁶⁾。『京都名勝記』の参照が顕著だからである。

なお、翻刻文中、『京都名勝記』を参照したと判断できる箇所は下線で、同書と全く同一の文言は二重下線で示す。原稿中のミセケチは中線で示す。

長い間逗留して居るうちにつれて、だんだんせゝこましい京都の風俗が鼻へ着いて来た。何だか廣々とした海洋のまん中から、古臭い沼のほとりへ引張り込まれたやうな気がする。「どうも此の辺は閑静なことで、まことに風流なお住居でげす。」など、顎をしゃくって乙がつてばかりも居られなくなつた。昔、桓武天皇奠都の當時の平安京は、どれ程堂々として、どれ程活氣に充ち充ちて、新鮮な感銘を庶民に與へたであらう。延暦年中、窮屈な長岡の舊都から、儀榮鹵簿を備へて新都の皇居に遷幸あらせられ、「子来之民。謳歌之輩。異口同辞。号曰平安京。今宣に従之。」と詔を下された桓武帝のお喜びは無かりと察せられる。碧瓦を葺き、鴟尾を飾り、円楹甃瓦、丹腹粉壁、出来たてのほやほやの羅城門を潜つて、朱雀大路を眞直ぐに、廟堂へ参内する公卿達も、定めて胸がすがすがしかつたらうと思はれる。

先斗町の茶屋酒が身に沁み込んだか、二三日体がだるくて頭が重苦しく、体の節々がほぐれるやうな慵さを覚えるので、一に堪へかね、心機一轉の爲めに、私は一日地図を懐にして、私は平安京の舊蹟を踏査に出かけた。踏査と云ふと大袈裟に聞えるが、生憎手許に十分な参考書もないので、唯好い加減に中て推量を試みるだけである。

京都市の西端を南北に貫いて、遂に郊外の畑地へ出て了ふ千本通りが、古への朱雀大路であつたと云ふ。此の路が、平安京の中央を二等分して縦に走つて居たとすれば、現時の市街の中には、其の頃の左京の一部分のみが含まれて居る譯である。右京の趾は、嵐山電車の軌道の南北に廣がつて居る田甫路の、坦々たる平原が其れであらう。今の京極は昔の東京極で、昔の西京極は、今丹波街道に存して居る地名の辺だとすると、平安京の廣表は、少くも現時実に今日の二倍以上でなければならぬ。

明治二十八年に市民が奠都千百年祭を舉行した折、古への大極殿の趾を捜し出して、其の敷地の周圀をあたりに石垣を繞らし、紀念の石碑を建てたものが、上京下立賣下の小山町の西側と、葛野郡朱雀野村の一部に跨がつて存在して居る。此處に東西十九丈八尺、南北七丈四尺の殿堂が、蒼龍樓白虎樓を周圍に控へて、巍然として聳えて居たとすれば、當時の壯觀は思ひやられる。紫宸殿清涼殿を始め、皇居の宮殿は多く大極殿の東北に薨を連ね、今日の洗洞御所が昔の桃花坊に當ると云ふのだから北は一条より南は二条に至り、東は東大宮通りから西は西大宮通りに亘つて、南北四百六十丈、東西三百八十丈の大内裏が、此の辺に蟠踞して居た譯であるから、其の頃の形勢は、略之を察する事が出来よう。

内裏の外郭を包む十二の宮門のうち、朱雀門は南面の大門で、朱雀大路の正中に立ち、遠く平安京の入口なる羅城門と相呼應して居た筈である。朱雀門の舊跡は判然しないが、羅城門の方は、東寺の西三町餘のところ、千本通の南端に字采生と云ふ地名を留めて居る。即ち古への京師に朝する者は、先づ第一に東寺のほとりの羅城門をくゞり、其の時分の一等道路——今の畑中の千本通を北へ進んで、第二の朱雀門から第三の應天門にかゝり、遂に大極殿の南面の階に達するまで、一里餘の行程を歩まなければならない。其の途中には、王城鎮護の比叡山や將軍塚のある東山が、右方にちらちらと時々姿を現はし、左の方に愛宕山がの山脈が蜿蜒と連なつて、四顧の眺望に富んで居るから、うらゝかたうらうらと晴れ渡つた春の朝など、どのくらゐ百敷の大宮人の雅懐を豊かにしたことであらう。都良香が羅城門を過ぎて、「氣霽風櫛＝新柳髮＝」と詠んだ時、樓上に鬼の聲が聞えて、「氷消浪洗＝舊苔鬚＝」と対句を加へたと云ふ物語は、如何にも實際の情景にしつくりと適合して居る。

想像を逞しふすれば、まだいろ／＼の面白い事実が胸に浮かんで来る。芝居で名高い例の戻橋は、今でも市街の北方の、一条通の堀川にかゝつて居るが、昔三善清行の葬式が此の小橋を渡らうとした時、子息の淨藏が紀州熊野から駈けつけて来て、禁厭の法力を以て父を蘇生せしめてから、「戻橋」の名は起つたと傳へられる。「一条堀川の戻橋を渡りける時、東のつめに齡二十餘と見えたる女の、膚は雪の如くにて誠に姿幽なりけるが、紅梅の打着に守懸け、佩帯の袖に経持ちて、人も具せず只獨南へ向ひてぞ行きける。」とある平家物語劔の巻の描寫が、今更のやうに生き生きと眼に映つて来る。渡辺の綱は此處から鬼にさらはれて、南の方一里ばかりの空中を翔り、東寺の塔の頂辺を掠めて羅生門の屋根へどしんと叩き落されたのである。

第13回「大極殿趾」は6段落で構成されている。その検討は次節以降に譲るが、現行全集解題で見落とされている校異で、明らかな誤りを指摘しておきたい。

第4段落末尾に大内裏の規模が具体的数字で示されているが、現行全集では「東西三百六十

丈」と記されている⁷⁾。史実は「三百八十四丈」であるから、「三百八十丈」とある自筆原稿および初出紙⁸⁾当時の谷崎はおよそ正しい規模を認識していた。それが、単行本『悪魔』に収められる際に「三百六十丈」となり、その後「朱雀日記」を収載したすべての単行本や全集などに踏襲されている⁹⁾。編集者や校閲者はおろか、谷崎自身も見落としていた誤記である。

20丈(約60メートル)の違いは現実の都市空間としては看過できない規模だが、「朱雀日記」の内容に影響を及ぼす誤りではない。「生憎手許に参考書もない」まま地図だけを頼りに平安京の旧蹟を踏査したと谷崎は第2段落末に書いているが、それにもかかわらず具体的で詳細な数字を記している。仮に、こうしたデータを重視し、そらんじられるほど身についたものであったならば、単行本収載時に誤記を見逃さなかったであろう。それゆえこの誤記は、谷崎が、身につけていない知識に基づいて「朱雀日記」を執筆していた、つまりなにかしかを参照しながら執筆していたことをうかがわせるに足るものである。

2 「朱雀日記」と京都案内書

翻刻文の第4段落に、「明治二十八年に市民が奠都千百年祭を舉行した折、古への大極殿のあと趾を捜し出して、其の敷地のあたりに石垣を繞らし、紀念の石碑を建てた」と、大極殿遺趾の石碑のことが、建設の経緯とともに言及されている。

その建碑式は1896年(明治29)6月15日に行われている¹⁰⁾。京都府技手福田将善はその式典で「工事は明治二十七年十二月五日に始まり本年五月三十日を以て竣了¹¹⁾」したと報告しているため、谷崎が建設の経緯をも語れるような同時代の京都の案内書を参考にしたとするならば、1894年(明治27)12月から「朱雀日記」初出時の1912年(明治45)4月までの期間に刊行されたものに候補を絞ることができる。それが表1の38点である。1895年に刊行が多いのは、谷崎も云っているように平安遷都千百年紀年祭と第四回内国勸業博覧会が京都で開催されたからである。

もちろん、たとえば『都名所図会』など近代以前に刊行された案内書や古典の文学作品等を参考にしたことも十分に考えられる。しかし先に引用したように「生憎手許に参考書もない」旅の身で、「生れて始めて西京の地を踏」んだ(全集402頁)とするならば、ひとまずそれらに候補を絞って検討したとしても、大きく的外すこともないであろう。

「朱雀日記」には引用文とおぼしき鉤括弧でくくられた表記がいくつかある。平安京遷都の詔もその一つである。括弧付きがただちに引用であるとは断言できないが、明治末年の新聞に発表された文章の中に天皇の言葉を引くのであるから、細心の注意を払ったことは想像に難くない。

案内書38点のうち10点に詔あるいは遷都に関する記述がある。ここでは谷崎が引用してい

「朱雀日記」と『京都名勝記』（藤原）

る詔の最後の一句、つまり「^{いまよろしくこれにしたがふべし}今宣レ從レ之」に注目したい。詔の典拠となる『日本紀略』や『日本後紀』卷第三逸文には、この句はないからである。詔が発せられた延暦13年11月8日の条は、『日本紀略』、『日本後紀』卷第三逸文では「〔前略〕異口同辞。号曰_二平安京_一。又近江国滋賀郡古津者。先帝旧都。〔後略〕¹²⁾」と続き、先帝天智天皇が都に定めた大津京が廃絶された後、古津と呼ばれていた旧都を大津に復称する旨が記されている。したがって谷崎が『日

表1 1894年から1911年に刊行された京都案内書

	案内書等書名（著者、出版社）	出版年	平安京遷都の詔	大極殿址（平安京大内裏）	羅城門址	戻橋
1	『京都案内都百種』増補二版（辻本治三郎、尚徳館）	1894.12			○	
2	『京都名勝図会』上下（志水鳩峰、風月堂）	1895.2				○
3	『京都名所案内』（岩喜喜助、細川開益堂）	1895.3	○	○		○
4	『きやうと：名所と美術の案内』上、下（松山高吉、田中治兵衛）	1895.3	○	○		
5	『京けんぶつ』（安藤清、山田直三郎）	1895.3	○	○		
6	『京都名所手引草』（平安遷都記念祭協賛会編、村上勘兵衛）	1895.4		○	○	
7	『奠都記念祭聯合区域名所旧跡案内』（柴崎徳衛著発行）	1895.4				○
8	『京都新名勝誌』（平野保三郎編発行）	1895.4				
9	『京華要誌』（京都市編纂部、京都市参事会）	1895.4	○	○	○	○
10	『京都名勝案内記』（金森直次郎、飯田信文堂）	1895.4			○	○
11	『京都名所案内記』上・下（浅井広信、鳥居又七）	1895.4			○	
12	『京都案内記 歴史美術名勝古跡』（広池千九郎、史学普及雑誌社）	1895.4		○	○	
13	『京都名所案内』（竹内庄之助編、中村浅吉）	1895.4				
14	『京都名所案内』（青木恒三郎、山田直三郎）	1895.4			○	
15	『京都名所独案内』（清水光憲編、漫遊館）	1895.4			○	○
16	『京都名所独案内記』（石田幸三郎編発行）	1895.4				
17	『都の柴折』（大八木正太郎、大八木徳三発行）	1895.5			○	
18	『京都名所』（的場麗水、駈々堂）	1895.5			○	
19	『京都温故誌』（上村長一、松田庄助）	1895.5			○	○
20	『京都名所独案内』（的場麗水、吉野屋）	1895.5			○	○
21	『京都誌要』（山本顕造、清水正文堂）	1895.5	○			
22	『東海鉄道名所旧跡案内』（林莊太郎、金川書店）	1895.8			○	○
23	『京都名所案内』（片岡賢三編、風月堂）	1899.1			○	○
24	『日本形勝叢談』（関口隆正、東亜同文会京都支部）	1903.2	○			
25	『簡便京都案内』（京都市参事会編発行）	1903.3				
26	『京都名勝記』（京都市参事会著発行）	1903.4	○	○	○	○
27	『博覧会土産 大阪及び附近の名所案内』（山下雨之助編、岡本偉業館）	1903.4				
28	『京都名勝帖』（藤井孫六編、五車楼）	1903.5		○		
29	『京都鉄道名勝案内』（大江理三郎、京都鉄道名勝案内発行所）	1903.11				
30	『京阪名所案内』（白土幸力編、博盛堂）	1904.6			○	○
31	『日本漫遊案内』下（坪谷善四郎、博文館）	1905.4	○		○	○
32	『京都名勝案内』（大島旗山、小林書店）	1907.2	○	○	○	○
33	『日本新漫遊案内』増補版（田山花袋、服部書店）	1907.8		○	○	
34	『京都名所図会』巻一～巻八（『風俗画報』『大日本名所図会第六六号～七五号、川村文芽）	1909.2～1910.1		○	○	○
35	『七日の旅 漫遊案内』（落合昌太郎、有文堂）	1910.1				○
36	『新撰名勝地誌 巻一 畿内之部』（田山花袋、博文館）	1910.4			○	
37	『日本名勝史蹟』天の巻（伊藤銀月、前川文栄閣）	1911.4	○			
38	『鉄道院線沿道遊覧地案内』（鉄道院）	1911.6				

表中、○はその項目の記載があることを示す

本紀略』や『日本後紀』卷第三逸文を参照した可能性は低い。

さらに詔の直前にある「儀衛鹵簿を備へて新都の皇居に遷幸あらせられ」という一節に着目しよう。

桓武天皇が長岡京から平安京へ遷ったのは794年（延暦13）10月22日である。『日本紀略』、『日本後紀』卷第三逸文および『類聚国史』卷七八のその日の条は「車駕遷_レ于新京_一¹³⁾」と、天子が新しい都に遷ったと簡潔に伝えるのみである。それを谷崎は「儀衛」すなわち警護兵、儀仗兵と「鹵簿」すなわち「儀仗を具備した行幸・行啓の行列編成¹⁴⁾」を備えて遷ったとより詳細に語っている。行幸であるから警護の兵を伴う行列の移動となることは当然であろうが、史書の淡々とした記述に比べ、厳めしく、仰々しい表現となっている。

この「儀衛鹵簿」という表現や詔の「今宣_レ従_レ之」の一句の両方を用いているものが表1のなかに2点ある。『京華要誌』と『京都名勝記』である。いずれも京都市参事会が編集発行に関係しており、日付（『京華要誌』では遷幸が十一月、詔が十二月となっているが、誤記であろう）や句読点を除けばほとんど同一の文章となっている。

それも当然のことで、『京都名勝記』はその凡例で「本市は曩に京華要誌の編纂あり、今此書を編するに及び自から全書に負ふ処多く、殊に皇宮、離宮等は概ね全書に依りて少しく文字の排列を改め、且つ一二修正を加へしに過ぎず、必らずしも改作の必要を認めざれば也¹⁵⁾」と断っている通りである。



図1 『京都名勝記』（筆者蔵）

『京都名勝記』は1903年（明治26）に大阪で開催された第五回内国勲業博覧会の来訪者が京都まで足を伸ばすことを当て込んで刊行された¹⁶⁾。この点でも『京華要誌』を踏襲しているといえる。『京華要誌』は遷都千百年紀年祭にあわせて京都で開催された第四回内国勲業博覧会にあわせて市の事業として編纂されたものだからである。

両案内書の遷都の詔を含む記述は次の通りである。引用は『京都名勝記』に拠った。

延暦十三年十月廿二日、儀衛鹵簿を備へて長岡の京より新都に遷幸あり。同十一月八日詔して曰く、此国山河襟帯。自然成_レ城。因_レ此形勝_一。宣_下改_レ山背_一為_レ中山城国_上。子来之民。謳歌之輩。異口同辞。号曰_一平安京_一。今宣_レ従_レ之。云々と、是に於て新都は平安京と号せられて、万世不遷の帝都と定まれり¹⁷⁾。

京都市参事会が編纂しているだけあって、日付までが詳しく記述されている。その典拠は『日本紀略』に淵源できるが、『平安通志』との関わりも考慮する必要がある。『京都名勝記』は『京華要誌』を踏襲していることはすでに述べたが、その『京華要誌』の編集が京都市編纂部に付託された「当時平安通志の編纂正に酣に部員寡少事務多端にして一意力を此書に集むる能はず¹⁸⁾」とあり、『平安通志』と『京華要誌』が同時期に同一の組織によってまとめられており、たとえば桂離宮の記述が全く同一であるなど¹⁹⁾、両者の相同性が指摘されている。

その『平安通志』には、遷幸は「日本紀略ニ、同〔引用者注、延暦〕十三年十一月廿二日、此京ニ遷御シ²⁰⁾」と、また同書「平安京造営年表」十月廿二日の条にも「車駕新京ニ遷ル^{マテ} 舊史 皇宮先ツ成リシヲ以テ遷都アリシナルヘシ²¹⁾」と記されているだけである。すなわち『京華要誌』にある「儀衛鹵簿を備へて長岡の京より新都に遷幸あり」との一文は、史書の条文に歴史解釈を付け加えた表現であり、それが『京都名勝記』にも踏襲されている。

その「儀衛鹵簿を備へて」との表現が、「朱雀日記」の谷崎と偶然にも一致した可能性は否定できないが、それは極めて低いと考えるのが妥当な見解であろう。

さらに、大内裏の規模を確認してみよう。前節で見たように「朱雀日記」自筆原稿および初出紙では「南北四百六十丈、東西三百八十丈」と記されているが、正確には『平安通志』にあるように南北は460丈、東西は384丈である²²⁾から、東西が4丈少なく記されている。一の位を略したとも考えられなくはないが、わざわざ具体的数値を挙げているのに略す理由が見つからないし、大極殿は「東西十九丈八尺、南北七丈四尺²³⁾」と尺の単位まで記されているのだから、谷崎が参照した文献が380丈と記していたことに因ると考えるのが自然であろう。

谷崎は大極殿旧趾の石碑に言及しているが、その碑文には大内裏の大きさも刻まれている。そこには「大内裏四至 北偉鑿門二百八十九丈 南朱雀門百七十一丈 東待賢門百九十二丈 西藻壁門百九十二丈²⁴⁾」とあり、それぞれ足せば南北460丈、東西384丈となるので、仮に谷崎が碑文を見て大内裏の規模を記したとしても380丈とはならない。

表1の案内書で大内裏の規模を具体的数字で示したものは5点あり、うち384丈としたものが3点、380丈としたものが『京華要誌』と『京都名勝記』の2点である。

遷都の詔、「儀衛鹵簿を備へて」といった史書にはない表現、さらに大内裏の380丈という曖昧な数字の一致などを考え合わせれば、谷崎は『京華要誌』あるいは『京都名勝記』を参照して「朱雀日記」を執筆した可能性が高いのではないか。この絞り込みが妥当だとするならば、それをより確かにし、いずれかに特定できるならば特定すること、それが次の課題となる。そのためには『京華要誌』と『京都名勝記』の特徴を、「朱雀日記」に関する項目に関してだけでも、描き出しておかねばならないだろう。

3 『京華要誌』と『京都名勝記』

『京華要誌』は、先に述べたように遷都千百年紀年祭の事業の一つとして編纂された。『平安遷都紀年祭紀事』によれば、明治26年(1893)12月20日に京都市編纂部に委託され、翌27年12月に成稿を同委員会に提出²⁵⁾したとあるから、約一年間でまとめられたことになる。しかしそれは容易な作業でなかったようである。『平安通志』の編纂作業と重なり煩忙を極める上に、参考文献は数十年前のものしかなく、明治維新前後の騒乱で名勝旧蹟の盛衰廃興が多いにも関わらず実地の調査の余裕もなかったことが、同じく『平安遷都紀年祭紀事』に記されている²⁶⁾。

それを承けてか、『京華要誌』の記述には漏れやムラがあるため、大阪で第5回内国勸業博覧会(明治36年)が開催され京都への旅行者も増えるであろうから、新たに編集員を命じて京都案内書の大成を期したものが『京都名勝記』であると、その序文に京都市長内貴甚三郎は記している²⁷⁾。『京都名勝記』各巻冒頭に「黒田讓編」と記されているので、京都日出新聞記者で美術評論なども手掛けた黒田天外が責任者として編纂にあたるよう任命されたことが伺える。その「凡例」謝辞には、京都探勝会を組織した舟木宗治の名も見える。『京都名勝記』の編纂にあたった具体的な人員は詳らかにしないが、『京華要誌』編纂に携わった人々が湯本文彦を中心に組織された『平安通志』編纂部の一部であったことと比べれば、より大衆的な観光案内を目指したといえるかもしれない。『京都名勝記』と『京華要誌』それぞれの編纂組織の分析²⁸⁾は歴史学的には必要な作業であろうが、本稿では谷崎研究の立場から、特に両者で引用される古典文学の相違に着目し、その特徴とそれらが谷崎潤一郎に及ぼしたであろう影響を見定めることに焦点を絞りたい。

皇宮や離宮の記述については『京華要誌』を踏襲した『京都名勝記』だが、名所旧跡などはこの限りではない。その凡例に「史蹟旧趾等を記するに、間ま古書の成文を挿入し、また詩歌俳句等の各名勝に係るものは勉めて之を蒐録す、これ一読の際趣味を豊饒ならしめんが為め也²⁹⁾」とある通り、『京華要誌』と比較して古典文学が多く引用されている。その具体例として、翻刻文第5段落で谷崎も言及している羅城門旧趾の項を読みくらべてみよう。それぞれ項目の全文を引用する。

羅城門旧趾 東寺南門西三町余

中古までは四塚民家の東に礎石遺れりといふ今詳かならず羅城門は古昔平安城の南大門にして今東寺南門跡より西百五十丈千本通の南端にありて字來生らいせいと呼ふ地は即ち其遺址なりといふ四塚に相接せり

(『京華要誌』下 300-301 頁)

羅城門旧趾 東寺南門西三町余

羅城門は古昔平安城の南大門にして、棟行東西とし、上に楼あり、楼の四方に縁欄干を繞らし頗る宏麗なりし。と、桓武天皇が此門造営の時、御輿をとめて叡覽あり、いとよく立たれど、長は今一尺切るべし、然らざれば風に吹倒さると仰せられしこと世継物語に出で。都良香此門を過て、氣ハ霽レテ風ハ櫛ルニ新柳ノ髮ヲと詠せしに、楼上に声ありて、水ハ消テ浪ハ洗テ舊苔ノ鬚ヲと對せしこと十訓抄に見ゆ。其旧趾は東寺南門跡より西百五十丈、千本通の南端にありて、字来生といひ四塚に接せり。中古までは四塚民家の後園に、其礎石残りたりといへど今詳ならず。

（『京都名勝記』中 60-61 頁）

『京華要誌』では羅城門旧趾の位置が簡潔に記されている。それに対し『京都名勝記』では、鎌倉時代の説話集『世継物語』（別に「小世継」とも呼ばれる。『大鏡』『栄花物語』を「世継物語」と称することがあり、それと区別するためである）から「柏原の帝の御時に」ではじまる桓武天皇が羅城門の柱を低くすることを命じた条³⁰⁾と、『十訓抄』十ノ六にみられる羅城門の鬼が下句を付けた話が付け加えられている。史蹟に関しては『京都名勝記』が『京華要誌』を踏襲したわけでないことがよく見て取れよう。

『世継物語』の条は桓武天皇の叡慮が正しく、仰せに従わず柱を低くしなかったため羅城門が風で倒れたことを語っている。つまり羅城門が現存しない理由と、桓武天皇の慧眼、ひいては賢帝であることを示している。その話を引いた『京都名勝記』は、桓武天皇を賞賛し、京都がその具眼を以て都に定められた王地であることを暗黙裡に語っているといえよう。京都市参事会の立場とすれば当然の態度であろう。

しかしながら、『世継物語』も『十訓抄』も、『京都名勝記』がその記述を探し出して初めて引用したわけではない。すでに近世期の地誌案内書類に引かれている。たとえば『雍州府志』巻九には『世継物語』と典拠は示されていないが、桓武天皇が柱を低くせよと命じたことが記されている³¹⁾し、『山城名勝志』巻之五「羅城門」の項には「小世継云」と出典を明示して語られてもいる。

都良香の鬼の付句の話に関しても多くの類書に引かれている。『京童』『京雀』『山城名勝志』『都名所図会』等々であるが、『新修京都叢書』および『新撰京都叢書』の索引に従って「羅城門」の項を調べると、典拠に『十訓抄』を記しているものは『山城名勝志』のみである。無論このことが、『京都名勝記』が『山城名勝志』に従った、ということの意味しないことはない。『京華要誌』をはじめ多くの先行する類書を参照したことは、『京都名勝記』序文で「名家逸士之詞藻等博採洽収」と、内貴甚三郎が語っているとおりであろう³²⁾。

『山城名勝志』巻之五「羅城門」の項には、この対句に関わって『江談抄』、『十訓抄』、『東

斎随筆』、『梅城録』が挙げられている³³⁾。ここに記されているように、この説話は多くの古典籍に採られ、新編日本古典文学全集版『十訓抄』付録の「関係類話一覧」には、『江談抄』『東斎随筆』『撰集抄』はじめ12が挙げられている³⁴⁾。そこには『山城名勝志』や『都名所図会』で挙げられている『梅城録』が抜けているので、『十訓抄』と併せてすくなくとも14の古典籍に採られていることとなる。それらの中から『京都名勝記』は『十訓抄』を典拠に挙げている。そこには、表立ってはいなくても『京都名勝記』編集の意図が底流に潜んでいるように思われる。

『京都名勝記』に引用されている鬼の付句の説話は『十訓抄』ではさらに、都良香がこの対句を菅原道真に披露したところ、即座に下の句は鬼の詞であろうと看破されたと続いている³⁵⁾。この説話は、878年(元慶2)1月の内宴の席で都良香が詠じた詩が『和漢朗詠集』(1013年頃)に収められ、その詩韻に鬼も感じ入ったとの評価が加わり(『江談抄』1111年までには成立)、それが下の句は鬼による付句との説話となり(『和漢朗詠集私注』1161年)、さらに天神信仰の影響によって菅原道真の看破の件が加わった(『十訓抄』1252年)と変遷した³⁶⁾ そうである。これを踏まえれば、この対句にまつわるエピソードには、(一)鬼が感じ入ったことも含め都良香の対句そのものの文学的評価、(二)羅城門の鬼が下の句を付けた奇譚、(三)それを看破した菅原道真の慧眼の三つの要素が含まれているといつてよからう。

この説話を収めた主だったものを分類すれば、『和漢朗詠集』と『江談抄』は(一)、『撰集抄』(1250年前後)は(二)、『十訓抄』と『梅城録』は(三)に分類できる。『和漢朗詠集』は広く知られているが、羅城門の鬼が下句を付けたとの挿話はなく対句だけが記載されている。すなわち羅城門の名称すら記されていないのだから、どれほど有名であろうとこれを典拠とすることはできない。『撰集抄』は西行作と信じられていたためよく読まれていたので典拠に挙げられたとしても不思議ではないが、『京都名勝記』では採られていない。そこで『十訓抄』を典拠にあげた『山城名勝志』とともに、同じく(三)に分類され天神信仰に関わる『梅城録』を典拠に挙げた『都名所図会』の影響が考えられる。

『都名所図会』羅城門旧趾の項には「梅城録に日都良香羅城門を過る時とりやうきやう気霽風櫛新柳髪と詠したりければ楼上に声ありて氷消浪洗旧苔鬢とつけたりこれを菅相丞の御前にて詠したりければ自歎し給ひて下の句は鬼詞なりと仰られける³⁷⁾」とある。『梅城録』は呆庵著、1425年(応永32)頃成立(『国書総目録』)の菅原道真を頌した25章からなる漢文体の一卷で、その「浪洗苔鬢知鬼語。春生柳眼悦皇情。才高見忌古皆是。貝錦萋兮誰織成。」の章にこの付句の説話が記されている³⁸⁾。『梅城録』と『十訓抄』とでは後者がより一般的なのは明らかであろう。さらにいえば、漢文体の『梅城録』に比べはるかに通俗的である。『十訓抄』をわざわざ典拠に挙げた『京都名勝記』の羅城門旧趾の項は、『都名所図会』と同じく庶民からひろく崇敬されている天神信仰をその底流に潜ませながら、『都名所図会』と比べてより手に取りやすい典拠

を記して、高踏的になることを避けているように見受けられる。『京都名勝記』凡例には次のようにある。

社寺の縁起、古跡の伝説等往々荒唐無稽に類するものありと雖も、而も往昔に於る熱烈の信念と、微妙の感孚とは、懷疑浅膚の観念を以て俄かに是非すべからざるものあり。且や其縁起伝説は即ち社寺古跡の生命なるを以て、其太甚しき荒謬のものを除くの外概ね之を採録し、以て一に読者の鑑裁を待つ
（『京都名勝記』凡例）

「熱烈の信念と、微妙の感孚」、「縁起伝説は即ち社寺古跡の生命」など、「凡例」とは思えないほど情熱的な文言である。『京華要誌』では社寺の縁起や古跡の伝説は「荒唐無稽に類するものあり然れとも伝来の久しく世人の口耳に爛熟したるものは一切抹殺するに忍ひす姑く採つて之を記載せり³⁹⁾」と、とりあえず一時的に記載する断りのようにも受け取れる消極的な方針とは大きく異なっており、「荒唐無稽」な伝説を積極的に記述しようとしたことが十二分に伝わってくる。両者のこうした相違は、翻刻文第6段落で言及されている一条戻橋についての、それぞれの項でもまた見られるところである。

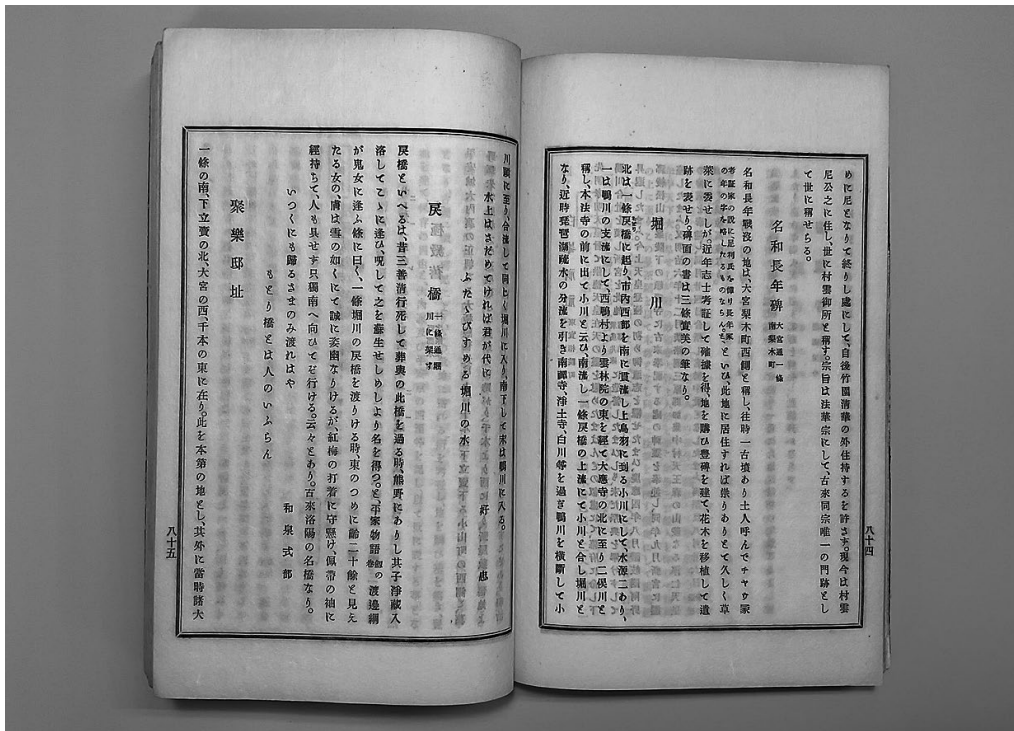


図2 『京都名勝記』中巻「戻橋」

戻橋 一条通堀川に架す

もとり橋の名義に就き諸説あれとも概して信拠し難し源氏物語宇治の巻にゆくはかへるの橋なりとあるは是なりと云ひ其名は昔より称し来りしものにて和歌にもよみ込みたり懷中抄物名に「かきりなき人に逢夜の暁に鳴ともマりは忍ひ音になけ」と見ゆ

(『京華要誌』上 250-251 頁)

戻橋 一條通堀川に架す

戻橋といへるは、昔三善清行死して葬輿の此橋を過る時、熊野にありし其子浄蔵入洛してこゝに逢ひ、呪して之を蘇生せしめしより名を得つ。と、平家物語剣の巻の渡辺綱が鬼女に逢ふ條に曰く、一條堀川の戻橋を渡りける時、東のつめに齡二十余と見えたる女の、膚は雪の如くにて誠に姿幽なりけるが、紅梅の打着に守懸け、佩帯の袖に経持ちて、人も具せず、只独南へ向ひてぞ行ける。云々とあり。古来洛陽の名橋なり。

いつくにも帰るさまのみ渡れはや

もとり橋とは人のいふらん 和泉式部

(『京都名勝記』中 85 頁)

戻橋の名の由来に対して、正反対ともいえる態度が見て取れよう。『京華要誌』では「諸説あれとも概して信拠し難し」と切り捨てているのに対し、『京都名勝記』は三善清行が子の浄蔵によって一時的にでも蘇生したことを記している。この逸話は『撰集抄』巻七に見える。

浄蔵は、善宰相のまさしき八男ぞかし。それに八坂の塔のゆがめるを祈り直し、父の宰相の此世の縁つきて去り給ひしに、一条の橋のもとに行きあひて、且く観念して蘇生し奉られけり。伝へ聞くも有りがたくこそ侍れ。さて、その一条の橋をばもどり橋といへるは、宰相のよみがへり給ひつるゆゑに名付けて侍り。

源氏の宇治の巻、ゆくはかへるの橋なりと申したるはこれなりとこそ、行信は申されしか。宇治の橋といふはあやまれる事にや侍るらん。⁴⁰⁾

『撰集抄』は清行の蘇生と戻橋の名付け、そして「源氏物語宇治の巻にゆくはかへるの橋なりとあるは是なり」と続いている。『京華要誌』に引かれている源氏物語のくだりは『撰集抄』を典拠としていたことがわかる。死者が蘇るという「荒唐無稽」な逸話は退け、『源氏物語』で語られているとのくだりは採用する。戻橋を説明するにあたって『京華要誌』はこうした立場をとった。近代的な理性と源氏物語の持つ古典の権威を両立させようとしたと言って良いかもしれない。

しかし『源氏物語』に「ゆくはかへるの橋」を叙した箇所は見当たらず、桜楓社版『撰集抄』頭注では、その出典を「不明」とし、「[例の心弱さは一つ橋危がりて帰り来たりけん者のように]（手習）とある個所のことか」と推察している⁴¹⁾。平安遷都千百年紀年祭を控え、『平安通志』と並行して進められた『京華要誌』に、典拠をさらに調べる余裕はなかったであろう。「編纂の時間が短かったため、見落とししたものや記述にムラがあることは免れなかった。名勝があまりに多いため記事も膨大になるので、一朝に大成を成すことを求め得ないのはやむを得ないことだった（大意⁴²⁾」と、内貴甚三郎が回顧している通りである。

また、『京華要誌』に「懐中抄物名に「かきりなき人に逢夜の暁に鳴ともとりは忍ひ音になけ」と見ゆ」とある歌も表記があやしい。

「懐中抄」は平安時代末期の歌学者勝命（1112～1184頃）の手になる歌集を指していると思われる。しかしそれは散佚歌集であって、佚文だけが伝わっている。その多くは名所に関わるもの⁴³⁾で、『歌枕名寄』に多く残っている。『歌枕名寄』は澄月撰になる名所和歌集で、1336年までには成立したとされているが、1659年（万治2）の刊本は9473首を収め「古来の名所和歌集の中でも、最も膨大な類題和歌集であろう⁴⁴⁾」と評されている。

その『名所名寄』巻第五戻橋に「かきりなき人にあふ夜のあかつきになくとも鳥はしのひねになけ⁴⁵⁾」とある。この四句、五句に仮に漢字を当てれば「鳴くとも鳥は忍び音に鳴け」とでもなるであろうが、「も鳥は忍」に「もとりはし」の音が隠されている。それゆえ『京華要誌』の編者はこの歌を戻橋の項に引こうとしたが、「とり」の「と」を踊り字「ト」と誤植された可能性が高い。それでなければ「物名」とは記載しないであろう。この歌のように物の名を隠し詠んだものを物名あるいは物名歌というからである。

それにしても名所の説明に物名歌を掲げるというのは、いささか銜いが過ぎよう。仮に「かきりなき人」が死別することがない人を意味し、戻橋の由来に通じているとしても、それならば三善清行の伝承を語るほうが理解しやすいだろうし、「其名は昔より称し来りしものにて和歌にもよみ込みたり」という歴史の古さを示すために「懐中抄」を挙げたとしても、汎く知られている歌集とはとても言えず、説得力を持つとも思えない。

戻橋を詠んだ歌では、『都名所図会』にも引かれている和泉式部の「いつくにも帰るさまのみ渡れはやもとり橋とは人のいふらん⁴⁶⁾」がはるかによく知られている。三善清行の伝承もまた『都名所図会』に記されている⁴⁷⁾し、『京都名勝記』は戻橋の項でも、清行の伝承や和泉式部の歌を引いている。さらにそれだけではなく、「古来洛陽の名橋なり」と戻橋を評価し説明を結ぶ文章に、「是洛陽の名橋なり⁴⁸⁾」と説明を終える『都名所図会』の影響を見て取ることさえできる。

しかし『京華要誌』では『都名所図会』記載の説話や歌は記載されていない。また『山城名勝志』巻三戻橋の項には和泉式部の歌に続いて懐中抄物名の歌が記されているから、仮に『山

『城名勝志』と『都名所図会』の双方を参照していたとすれば、『都名所図会』と重なる説話や歌を意図的に避けようとしたのかも知れない。井上章一は『京華要誌』を「じゅうらいの常套的な編集姿勢から脱却」し、案内書の「新しい伝統をこしらえたともいえる」と評している⁴⁹⁾が、そうした意図が働いていた影響か、『都名所図会』に対して敏感になりすぎていたのかも知れない。

対して『京都名勝記』では、『都名所図会』など近世までの案内書に引かれた章句を排除してはいない。しかしそれは決して復古的なものではなかった。『撰集抄』にあつて典拠のあやしい『源氏物語』の記述と術学的な「懐中抄」の歌を退け、名前の由来と信じられている三善清行蘇生伝説を採った。典拠を確認するという考証的な態度の下、多くの人に馴染み深い伝承を、手に取りやすい出典に基づいて記述したわけである。

それが羅城門や戻橋の項で「荒唐無稽」な伝説を復活させた形となった一方、皇宮や離宮の記述に関しては『京華要誌』をまったく踏襲した。『京華要誌』は明治中期以降の皇室観については確たる表現を成立させたが、それ以外の名所旧跡に関しては不十分であり、それを16ヶ月をかけて『京都名勝記』で補って「大成を期した⁵⁰⁾」というべきであろうか。しかもそれは、名所に関わる伝奇や奇譚を豊富に含む、文学的香気を湛えた案内書としてである。それゆえ、谷崎の想像力を大いに刺激したのだといつてよいであろう。

4 羅城門と羅生門

『京都名勝記』「戻橋」の項では先行する案内書にはない説話として、平家物語剣の巻から、渡辺綱と鬼女の邂逅という「荒唐無稽」な話を新たに採っている。それが「朱雀日記」執筆に際して谷崎が『京都名勝記』を参照した可能性が高いことを示す有力な証左となる。繰り返すとなるが重複をいとわず、翻刻文の第5、6段落をふたたび引いておこう。

内裏だいりの外郭を包む十二の宮門のうち、朱雀門おほもんは南面の大門で、朱雀大路まんなかの正中に立ち、遠く平安京の入口なる羅城門と相呼應して居た筈である。朱雀門の舊跡は判然しないが、羅城門とうじの方は、東寺とうじの西三町餘よのところ、千本通あざらしやうの南端に字来生とびと云ふ地名を留めて居る。即ち古への京師に朝する者は、先づ第一に東寺のほとりの羅城門をくゞり、其の時分の一等道路——今の畑中はたなかの千本通を北へ進んで、第二の朱雀門から第三の應天門にかゝり、遂に大極殿の南面の階に達するまで、一里餘の行程を歩まなければならない。其の途中には、王城鎮護の比叡山や將軍塚のある東山が、右方にちらちらと時々姿を現はし、左の方に愛宕山あしたがの山脈が蜿蜒と連なつて、四顧の眺望に富んで居るから、うら→かた→うらうらと晴れ渡つた春の朝など、どのくらゐ百敷の大宮人の雅懐を豊かにしたことであらう。

みやこのよし か
都 良香が羅城門を過ぎて、「氣霽風櫛＝新柳髮＝」と咏んだ時、樓上に鬼の聲が聞えて、
こほりきてはなみきゆうたいのひげをあらふ つひく
「氷消浪洗＝舊苔鬚＝」と対句を加へたと云ふ物語は、如何にも実際の情景にしつくりと
適合して居る。

想像を逞しふすれば、まだいろ／＼の面白い事実が胸に浮かんで来る。芝居で名高い例の戻橋は、今でも市街の北方の、一条通の堀川にかゝつて居るが、昔三善清行の葬式が此の小橋を渡らうとした時、子息の浄蔵が紀州熊野から駈けつけて来て、禁厭の法力を以て父を蘇生せしめてから、「戻橋」の名は起つたと傳へられる。「一条堀川の戻橋を渡りける時、東のつめに齡二十餘と見えたる女の、膚は雪の如くにて誠に姿幽なりけるが、紅梅の打着に守懸け、佩帯の袖に経持ちて、人も具せず只獨南へ向ひてぞ行きける。」とある平家物語劔の巻の描寫が、今更のやうに生き生きと眼に映つて来る。渡辺の綱は此處から鬼にさらはれて、南の方一里ばかりの空中を翔り、東寺の塔の頂辺を掠めて羅生門の屋根へどしんと叩き落されたのである。

前節で引用した『京都名勝記』「羅城門旧趾」、「戻橋」の項と読み比べていただきたい。

「羅城門旧趾」の項では、その立地、地名、さらに都良香の鬼の付句の説話に類似が見られる。もっとも楼上の声の主が「鬼」であるとは『京都名勝記』にはないので、谷崎がこの説話自身を知っていたり、ほかのものを参照した可能性は否定できない。

「戻橋」の項と比べてみると、両者とも名前の由来となった三善清行の説話が引かれ、つづいて『平家物語』「劔の巻」の章句が鉤括弧をつけて引用文のように語られている。括弧内最後の「行きける」が『京都名勝記』では「行ける」と、送り仮名一字の違いはあるが、他の文面は両者同じである⁵¹⁾。戻橋の紹介で「劔の巻」を引用した案内書は、『京都名勝記』のほかは、京都叢書所収の近世期のものにも、第2節で調査した38冊の明治期のものには見当たらない。それゆえ谷崎が案内書を参照して引き写したとすれば、『京都名勝記』以外のものを想定することは極めて困難である。

加えて、谷崎は「劔の巻」を読んではいなかったか、あるいは手元に置いていなかったと断言できる。おそらく「朱雀日記」執筆時以降、単行本に収載される際も確認すらしなかったとも思える。明らかな誤りがあるからである。

「劔の巻」の原文では「綱は北野の社の、廻廊の屋の上にとつと落つ。鬼は手を切られながら、愛宕へぞ飛行く⁵²⁾」と、北野天満宮の屋根に落ちることになっている。それも綱が鬼の腕を切り落としたため、腕もろとも空中から落ちたのであって、鬼に「叩き落された」のではない。

谷崎は「羅生門の屋根へどしんと叩き落とされた」と書き、その出典も示しているが、それは『平家物語』「劔の巻」の内容とは相容れない表現なのである。谷崎の記憶違いや勘違いと

いうことも想定できなくなはいが、引用文の正確さを考慮すれば、その可能性は低いといえよう。

「剣の巻」の引用に先立って谷崎は「芝居で名高い例の戻橋」と断っていることから、渡辺綱の鬼退治に関わるもので、谷崎の目に触れた可能性があると思われる黙阿弥作『戻橋』と『茨城』および観世信光作の謡曲五番目物「羅生門」といった歌舞伎や能、さらに巖谷小波『日本昔噺』所収の「羅生門」と御伽草子の「羅生門」を確認したが、いずれにも綱が空高く鬼に連れ去られ羅生門に落とされたくだりは見当たらない⁵³⁾。

「朱雀日記」と『京都名勝記』では「剣の巻」からの引用箇所が過不足なく完全に一致している。しかし「朱雀日記」は「剣の巻」の内容には通じていない。谷崎の誤りからそのことが見て取れる。しかも類似の説話を含むものなかにもその誤りと重なる記述は見当たらない。それにもかからず谷崎は正確な引用ができできているわけであるから、なにがしを参照して孫引きをしたと推測できる。戻橋の説明で『平家物語』「剣の巻」に言及しているのは、先に述べたように『京都名勝記』のみである。すなわち、前節までの議論と併せ、「朱雀日記」執筆時の谷崎が『京都名勝記』を参照した可能性はきわめて高いと判断できる。

さらに、谷崎は綱が落とされたのは「羅城門」ではなく「羅生門」と表記しているが、この表記の違いにも『京都名勝記』との関連を見て取ることができる。

「朱雀日記」連載第13回「大極殿趾」の初出紙では「羅生門」の語が6回使われている。しかし自筆原稿で確認すると、「羅城門」が5回、「羅生門」が1回使われ、表記が区別されている。単行本にはじめて収録された『悪魔』版「朱雀日記」では「羅城門」が5回、「羅生門」が1回、つまり原稿の表記に準じて初出紙の表記が改められ、その後の諸版はこの表記を踏襲している。谷崎が意図した区別であることは間違いなからう。

ただ一回のみ使用されている「羅生門」表記は、「大極殿趾」末文の渡辺綱が落ちたくだりに使われている。すなわち、史実としての平安京正門には「羅城門」を当て、鬼が登場する説話などのフィクションの物語で語られるものに対しては「羅生門」と表記されているのである。

このように書くと直ちに、鬼が対句を加えた「都良香が羅城門を過ぎて」との一節に矛盾していると批判されるであろうが、その一節は「如何にも実際の情景にしつくりと適合して居る」と続いているので、鬼が登場する前の、実在した情景を語ることに力点を置いているため「羅城門」と表記していると解せるであろう。

「羅城門」と表記された別の2箇所は本節で再引用した部分の冒頭箇所、羅城門の立地を『京都名勝記』に従って記した記述と、それに基づいて平安京当時の朱雀大路の歩む道りを描写する際に使われている。

そこでは「朱雀門は南面の大門で朱雀大路の正中に立ち、遠く平安京の入口なる羅城門を相呼応して」と表現されているが、これも「四方に十二の宮門あり。南面の大門を朱雀門と云ふ、

二重閣制にして朱雀大路の正中に当り、遙に羅城門と相望めり」（『京都名勝記』上「皇宮」22頁）を参照して書いたと思える。朱雀門や羅城門をそれぞれ個別に捉えるのではなく、朱雀大路の両端に両者が位置し相対していると捉える都市的広がりをもつ視点が共有されていることが、字面が類似している以上に重要であろう。そうした視点があればこそ、「朱雀日記」の谷崎の記述が大極殿趾から羅城門の都良香のエピソードへと違和感なく繋がっていくのである。

「羅城門」の語が使われる残りの一例からは谷崎が『京都名勝記』を丹念に読んでいたことが伺える。翻刻文の第1段落の該当箇所を再引用しよう。

碧瓦を葺き、鴟尾を飾り、円楹^ら甃瓦^{しやうもん}、丹朥粉壁^く、出来たてのほやほやの羅城門を潜つて、朱雀大路^{すざかおほぢ}を眞直ぐに、廟堂へ参内する公卿達も定めて胸がすがすがしかつたらうと思はれる。

あまり目にすることのない四字熟語が二つ並んで羅城門を形容している。「丹朥」は「朱色の鮮やかな土のこと」、「粉壁」は「胡粉で塗った壁。しらかべ」と諸橋大漢和に見えるから、「丹朥粉壁」とは朱塗りの軸組と白壁のことを指していると理解できる。しかし「円楹」、「甃瓦」は同大辞典にも見当たらない。「楹」は円柱や太い柱を指し、「甃」はいしだたみや平瓦の謂であるから、立派な円柱と平瓦を敷き詰めた基壇といったことを意味しているようだが、出典や典拠がはっきりしない、かなり特殊な熟語とってよいであろう。しかし谷崎は豪華で立派な建築物を形容する語句として後年の小説「金色の死」でも用いている⁵⁴が、この形容句もまた『京都名勝記』からの援用と考えられる。ただし、それらの熟語は『京都名勝記』では、大極殿を説明する際に使われている。

大極殿は北位に抛り南面す。東西十九丈八尺、南北七丈四尺、其屋廟造四阿、葺くに碧瓦を以てし、飾るに鴟尾を以てす、円楹甃瓦、丹朥粉壁、中央に高御座を設く。〔略〕大極殿は桓武天皇の殊に叡慮を尽し御造宮ありし所にして、宏壯華麗平安京第一の建築なり。

（『京都名勝記』上 22-23 頁）

皇宮に関わる記述であることから、『京都名勝記』のこの記述はほとんど『京華要誌』と同じでそれを踏襲している。しかし『平安通志』には「丹朥粉壁」の語は散見されるが、「円楹甃瓦」の字句は見当たらない⁵⁵から、「儀衛鹵簿を備へて」との一節と同じように「円楹甃瓦」という形容句は『京華要誌』に端を発する表現といえよう。それがそのまま『京都名勝記』に受け継がれたのも同様で、さらにそれを谷崎が引き継いだかたちである。

しかし先にも断ったように『京都名勝記』では大極殿に使われた形容句を、谷崎は羅城門に

用いた。それは一見するとおかしな転用と思われるかもしれないが、「〔引用者注；延暦〕十四年には大極殿落成し、同十五年正月元朔始めて大極殿の高御座たかみくらに臨御し百官の正賀を受け給へり（『京都名勝記』上、18頁）」の一節を見逃さず、その意味するところを正確に理解したからである、と受け取れる。なぜなら、この一節は大極殿は遷都が行われた延暦13年10月22日にはまだ未完成で、同14年中に竣工し、翌15年正月にはじめて大極殿で正賀を受けたことを含意しているからである。対して、史実としての羅城門竣工の時期はわかっていない。しかし桓武天皇が柱を切ることを命じたことを記す『世継物語』には、命令通りに短くすると遷都の日に間にあわなくなるからそのままにしたとある⁵⁶⁾。また『京都名勝記』「羅城門旧趾」にも「桓武天皇が此門造営の時、神輿をとめて観覧あり」とあるから、竣工していたかどうかは不明であるが、それに近い形で遷都の日を迎えたことであろう。すなわち、谷崎のこの転用は、平安京遷都当時、大極殿は未完成であるが羅城門は竣工に近いものであった史実と矛盾せずに、遷幸当時の「出来たてのほやほや」ですがすがしい新鮮な感銘を与える平安京のイメージを表現するためのものだったといえよう。

谷崎が『京都名勝記』によらず、この史実を知っていた可能性は否定し得ないし、その可能性も高い。それならばかえって、「円楹甃瓦」という珍しい熟語を羅城門に転用した慧眼をこそ認めるべきであろう。いずれにせよ、これまで論じてきたことから判断すれば、「朱雀物語」第13回執筆にあたって、『京都名勝記』を谷崎が参照していたと断定してよいであろう。

結びにかえて

「朱雀日記」は1912年（明治45）年4月27日から5月28日にわたって断続的に19回、「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」に連載された。これまで見てきたように、その第13回は『京都名勝記』の影響が顕著だが、連載すべてにわたって同書を参照したというわけではない。第3回「平安神宮」（4月29日）は、円山公園から知恩院、さらに三条御幸町にあった大阪毎日新聞京都支局から平安神宮を散策した内容であるが、それぞれの縁起や来歴などには触れていない。

たとえば「昔の大極殿だいごくでんを模した平安神宮に参る。新しい丹塗にぬりの建築で、丁度歌舞伎の大道具を見るやうな感じはあるが、一概に俗悪の名を以つて却しりぞける事は出来ない。古い神社仏閣の維持保存に努めると同時に私はかう云ふ Reproduction も非常に興味深く思ふ⁵⁷⁾」と書かれるだけで、それが明治28年の平安遷都千百年祭の際に建造されたことや具体的な大きさなどはいっさい記されていない。もちろん『京都名勝記』にはそれらが詳しく記されている⁵⁸⁾。その文章と比較すると、この第3回執筆時には『京都名勝記』を参照した形跡は伺えない。

『京都名勝記』を参照したと覚しき記述が見られるのは、第9回「嵯峨野」（5月7日）から

である。金子竹次郎（三条小橋にあった旅館の主人）らによって嵯峨野、嵐山に案内された散策記といった内容である。

その一節に「夢窓国師を開山に戴き、近く峨山和尚に依つて再建せられた天龍寺の少し先から、左へ曲ると、鬱蒼たる竹藪の中を一条の小径がうねつて居る⁵⁹⁾」とある。谷崎一行は天龍寺の門前を通っただけで参詣していないにもかかわらず、夢窓国師や峨山和尚など、特に必要とも思われない固有名を伴って説明が加えられている。こうした知識を同行者から得た可能性も考えられるが、新聞紙上に公表する連載に古社寺や名所旧跡などを紹介するのだから、より確かな情報を必要としたのであろうことは容易に推察できる。『京都名勝記』の天龍寺の項には、先の一節の説明に足るだけの記載がある⁶⁰⁾し、二尊院などにも似た表現がみられる⁶¹⁾から、嵯峨野散策を執筆する段になって金子など京都で知己を得た人々から紹介され、谷崎は『京都名勝記』を手にしたのではないか。その結果、「朱雀物語」第13回「大極殿趾」を書くことができたのだといえよう。表2は『京都名勝記』との対照を示したものである。第1節に掲げた翻刻文とを見比べてみよう。

「先斗町の茶屋酒が身に沁み込んだ」云々の序詞のような箇所を除いて、名所旧跡に関わる箇所を取り出せば、「大極殿趾」の原稿は『京都名勝記』の関連項目から内容を抜粋して再構成したかのようにも見える。谷崎の筆力からすれば、紙上探索だけでも十二分に可能であったろう。嵐山電車からみた右京の風景が語られているが、その電車に乗って嵯峨野を既に訪れているのだから、それを思い出せばそのくだりも執筆できる。「一日地図を懐にして、私は平安京の旧蹟を踏査に出かけた」とあるから、現地を訪れたのであろうが、それにしても「大極殿趾」の文章からは実地に見聞した実感はあまり感じられない。現実の風景よりは、想像力を重ねて描き出した文学的な平安京の方により関心があったということであろう。平安神宮を訪れて「平安朝の藝術を愛するよりも、平安朝の生活に憧れる人々に取って、此の建物は絶好の企てであらう。私は京都に滞在して居る間、何度も何度も此処を訪れて、じつと石礎（いしだゝみ）に腰を据ゑつゝ、遠い古へを偲ぼうと思ふ⁶²⁾」と語ったことをここで実践した、とでもいえようか。

『京都名勝記』には平安京遷都の日付、つまり794年（延暦13）10月22日と、詔を発した11月8日が明記されている。しかし谷崎は「延暦年中」と曖昧に表現している。意図があつたのであろう。旧暦の10月22日といえば、二十四節気の「小雪」に当たり、冬の寒さが本格化した頃である。それを「碧瓦を葺き、鴟尾を飾り、円楹甃瓦、丹雘粉壁、出来たてのほやほやの羅城門を潜つて、朱雀大路を真直ぐに、廟堂へ参代する公卿達も、定めて胸がすがすがしかつたらうと思はれる」と鮮やかな色彩と響きの良い漢語で爽快に語った。そのため「うらうらと晴れ渡つた春の朝」の澄んだ「氣霽風櫛新柳髮／氷消浪洗舊苔鬚」対句を喚び起こし、さらに鬼の連想から怪異譚にも無理なく繋がり、物語世界の中の「羅生門」が語られる。

表2 「朱雀日記」『京都名勝記』対照表

朱雀日記原稿（ルビ等は省略）	『京都名勝記』 項目名／本文／（巻頁）
<p>延暦年中、窮屈な長岡の舊都から、儀采鹵簿を備へて新都の皇居に遷幸あらせられ、「子来之民。謳歌之輩。異口同辞。号曰平安京。今宣従之。」と詔を下された桓武帝</p>	<p>京都沿革 延暦十三年十月廿二日、儀采鹵簿を備へて長岡の京より新都に遷幸あり。同十一月八日詔して曰く、此国山河襟帯。自然成城。因此形勝。宜改山背国為中山城国上。「子来之民。謳歌之輩。異口同辞。号曰平安京。今宣従之。」 (上 17-18 頁)</p>
<p>明治二十八年に市民が覺都千百年祭を舉行した折、古への大極殿の趾を捜し出して、其の敷地の周囲をあたりに石垣を繞らし、紀念の石碑を建てたものが、上京下立賣下の小山町の西側と、葛野郡朱雀野村の一部に跨がって存在して居る。</p>	<p>大極殿旧址 葛野郡朱雀村字聚楽廻 平安城大内裏の正朝なる大極殿旧址は、上京千本通下立売下の小山町の西側と、葛野郡朱雀村大字聚楽廻小字狐草とに跨がり、千本より西に入り、新屋敷の旧地より北に当れる一帯の地にして、今なほ地中より残礎碧瓦など掘出すことあり。明治二十八年京都覺都千百年祭を舉行せし際、大極殿は桓武天皇の最も大御心を尽して造営し給ひしところなれば、其旧址に於て之を模造し天皇の神宮を創設せんとの議もありしが、故ありて岡崎町に造営する事と定まり、此旧址は別に保存する事となり、古因に徴し旧記により、その敷地に当れる所を考查し、地を贖ひ基を築き、豊碑を建て、保存の因由と、大内裏及び平安京の四至等を記し、以て世に表する事となれり。此地に至り高きに抛りて四望すれば、京洛の山河相映発して、延暦の雄園宛然目前に在るを覚ゆ。 (中 86-87 頁)</p>
<p>此處に東西十九丈八尺、南北七丈四尺の殿堂が、蒼龍樓白虎樓を周圍に控へて、巍然として聳えて居たとすれば、當時の壯觀は思ひやられる。紫宸殿清涼殿を始め、皇居の宮殿は多く大極殿の東北に覺を連ね、今日の洗滌御所が昔の桃花坊に當ると云ふのだから北は一条より南は二条に至り、東は東大宮通りから西は西大宮通りに亘つて、南北四百六十丈、東西三百八十丈の大内裏</p>	<p>皇宮 大内裏は平安京の北位にあり、北は一條より南は二條に至り、東は東大宮通りより西は西大宮通りに至る。南北四百六十丈、東西三百八十丈、繞らずに土垣溝渠を以てし、四方に十二の宮門あり。南面の大門を朱雀門と云ふ、二重閣制にして朱雀大路の正中に當り、遙に羅城門と相望り。其東に美福門あり、其西に皇嘉門あり、皆二重閣制なり。東には陽明門侍賢門郁芳門、西には殿宮門澤壁門談天門、北には俣鑿門達智門案嘉門、外に東に上東門西に上西門あり。 [略] 大極殿は北位に抛り南面す。東西十九丈八尺、南北七丈四尺、其屋廟造四阿、聳くに碧瓦を以てし、飾るに鸞尾を以てす、円極甍瓦、丹襖粉壁、中央に高御座を設く。小安殿は其北にあり、蒼龍樓は其巽にあり、白虎樓は其坤にあり、南廷の南龍尾道あり、其南に十二堂ありて東西相対す。会昌門は応天門の内にあり、其前に東西朝集堂ありて相向へり。大極殿は桓武天皇の殊に敬慮を尽し御造宮ありし所にして、宏壯華麗平安京第一の建築なり。[略] 皇居は大極殿の東北にあり、南北一百丈、東西七十丈、南に建礼門東に建春門北に朔平門西に宜秋門あり、之を皇居の四門といふ。其内に中隔あり、繞らずに重廊を以てす。南に承明門あり、其内に紫宸殿あり、九間四面にして南面す、内裏の正殿にして、内朝儀式の行はる所とす。清涼殿は常の御所にて、紫宸殿の乾位にあり、昼御座、石灰壇、夜御殿、台盤所、朝餉間、弘徽殿、桐壺、上局、萩戸は此の殿にあり。[後略] (上 22-23 頁)</p> <p>仙洞御所 皇宮の東南にあり、北は上長者町より、南は下立売に至り、西は皇宮東垣より、東は寺町通に至り、西北は大宮御所に隣る、地積二万二千五百六十二坪あり。旧大内裏時代の桃花坊に當り、藤原氏の土御門殿、京極殿の池に係り、昔時は金殿玉樓、雲に聳へ霞を帯び煌華偉麗なりしが。[略] (上 37 頁)</p>
<p>羅城門の方は、東寺の西三町餘のところ、千本通の南端に字來生と云ふ地名を留めて居る。即ち古への京師に朝する者は、先づ第一に東寺のほとりの羅城門をくぐり、其の時分の一等道路——今の畑中の千本通を北へ進んで、第二の朱雀門から第三の應天門にかかり、遂に大極殿の南面の階に達するまで、一里餘の行程を歩まなければならない。其の途中には、王城鎮護の比叡山や將軍塚のある東山が、右方にちらちらと時々姿を現はし、左の方に愛宕山がの山脈が蜿蜒と連なつて、四顧の眺望に富んで居るから、ちらちらうらうらと晴れ渡つた春の朝など、どくらの百敷の大官人の雅懷を豊かにしたことであらう。都良香が羅城門を過ぎて、「氣霽風梳新柳髮」と詠んだ時、樓上に鬼の聲が聞えて、「水消浪洗舊苔鬘」と対句を加へたと云ふ物語は、如何にも實際の情景にしつくりと適合して居る。</p>	<p>羅城門旧址 東寺南門西三丁余 羅城門は古昔平安城の南大門にして、棟行東西とし、上に樓あり、樓の四方に緑欄干を繞らし頗る宏麗なりしと、桓武天皇が此門造営の時、神輿をさめて散覧あり、いとよく立たれど、長は今一尺切るべし、然らざれば風に吹倒さると仰せられしこと世雜物語に出て。都良香此門を過て、氣霽風梳新柳髮と詠せしに、樓上に声ありて、水消浪洗舊苔鬘と對せしこと十訓抄に見ゆ。其旧址は東寺南門跡より西百五十丈、千本通の南端にありて、字來生といひ四塚に接せり。中古までは四塚民家の後園に、其礎石残りたちといへど今詳ならず。 (中 60-61 頁)</p>
<p>芝居で名高い例の戻橋は、今でも市街の北方の、一条通りの堀川にかゝつて居るが、昔三善清行の葬式が此の小橋を渡らうとした時、子息の淨蔵が紀州熊野から駆けて来て、禁厭の法力を以て父を蘇生せしめてから、「戻橋」の名は起つたと傳へられる。「一条堀川の戻橋を渡りける時、東のつめに齡二十余と見えたる女の、膚は雪の如くにて誠に姿幽なりけるが、紅梅の打着に守懸け、佩帯の袖に経持て、人も具せず只獨南へ向ひてぞ行きける」とある平家物語の巻の描寫が、今更のやうに生き生きと眼に映つて来る。渡辺の綱は、此處から鬼にさらはれて、南の方一里ばかりの空中を翔り、東寺の塔の頂頭を掠めて羅生門の屋根へどしんと叩き落とされたのである。</p>	<p>戻橋 一条通堀川に架す 戻橋といへば、昔三善清行死して葬奠の此橋を過る時、熊野にありし其子淨蔵入浴してこゝに逢ひ、呪して之を蘇生せしめしより名を得つと、平家物語の巻の渡辺綱が鬼女に逢ふ條に曰く、一條堀川の戻橋を渡りける時、東のつめに齡二十余と見えたる女の、膚は雪の如くにて誠に姿幽なりけるが、紅梅の打着に守懸け、佩帯の袖に経持て、人も具せず、只獨南へ向ひてぞ行ける。云々とあり。古來洛陽の名橋なり。 いつくにも帰るさまのみ渡ればやもとり橋とは人のいふらん 和泉式部 (中 85 頁)</p>

しかしより重要なのは、『京都名勝記』では大極殿を形容した「円楹甃瓦」,「丹腹粉壁」の語句を羅城門に移してまでも、遷都当時の平安京の姿を描き出そうとした点にある。都良香の句は878年（元慶2）1月20日の内宴の席で詠まれたものである。また戻橋の由来となった三善清行は918年（延喜18）に亡くなっている。また渡辺綱は953年（天曆7）に生まれ1025年（万寿2）に亡くなっている。羅城門は980年（天元3）7月9日の暴風雨で倒壊した後は再建されていない。谷崎の文章はこれらの年代の違いを殆ど感じさせることなく、それぞれのエピソードを語り、「出来たてのほやほやの」壮大で清新な新都平安京のイメージを描き出している。それは平安神宮を訪ねた折に想像した平安朝のイメージとも重なる。

谷崎は「青々と晴れ渡つた空の色が、鮮かな丹塗の柱と相映じ、翼の如く左右に伸びた回廊の石甃いしだみにうらうらと春の日の漂ふ美しさ」と青空に映える平安神宮社殿を語った直後、ただちに「平安朝初期の、雄大崑麗な内裏の倂や、廟堂の有様が、まざまざと眼の前に泛んで来るやうな心地がする⁶³⁾」と豊かに想像を働かせる。「朱雀日記」の谷崎にとっての平安朝とは、遷都当初、しかも春の平安朝であったことが、この記述からもうかがい知れよう。そして、このイメージは、後年の作中で仮構される芸術的理想郷の表現へと展開していくことになる。

「金色の死」（1914年（大正3））は、莫大な財産を相続した岡村という青年が、古今東西の名建築や芸術作品の模倣で埋め尽くされた「藝術の天国⁶⁴⁾」を作り出し、最後はみずからの身体を金箔で塗抹して如來に化身したまま死んでいく、というストーリーである。その「藝術の天国」は「パルテノンの倂を模し、鳳凰堂の趣に倣ひ、或はアルハムブラの様式を学び、グチカンの宮殿になぞらへ、山々谷々の丹腹粉壁は朝日に輝き、円楹甃瓦は夕陽に彩られ、「蜀山兀として阿房出づ」と云ふ古の詩の文句がさながら此処に現出されたかと訝まれます⁶⁵⁾」と表現されているが、「丹腹粉壁」,「円楹甃瓦」の語句が、芸術的理想郷を構成する建築の形容句として使われている。

また、平安時代に強く憧れる高校教師の夢を描いた戯曲「鶯姫」（1917年（大正6））は、羅生門に巣くう青鬼が狂言回しとなって教師を平安時代に連れていき赤鬼に変身させ、密かに思いを寄せていた女子生徒の先祖にあたる鶯姫をさらうという夢の話であるが、その青鬼は都良香に句を授けた鬼で、件の対句もまた引用されている⁶⁶⁾。

形容句や対句の引用にとどまるとはいえ、両者とも『京都名勝記』との邂逅によって谷崎に吹き込まれた章句であること、さらにその複数の記事から必要な情報を取捨選択し、遷都当初の平安朝を「朱雀日記」で描き出したことを踏まえれば、それらは、大正初期の谷崎が憧れる想像上の理想郷を文学的に表現する、重要なキーワードになっていたと考えられる。決して大きな水脈ではないが、細いながらも確たる流れとして『京都名勝記』の影響は続いていたのである。明治45年の「朱雀日記」の京都の旅で谷崎が得た大きな収穫の一つが、『京都名勝記』であったと言ってよいであろう。それが後年の谷崎に及ぼした影響のさらなる検証は他日を期

すこととし、同書に導かれて「朱雀日記」を執筆したことの考証を以て本稿の結論としよう。

注

- 1) 「朱雀日記」、『谷崎潤一郎全集』第一巻，中央公論新社，2015年，402頁。以下、「朱雀日記」からの引用は、自筆原稿からの引用を除き、同全集頁数のみ記す。
- 2) 京都市参事会『京都名勝記』五車楼書店，1903年
- 3) 京都市編纂部『京華要誌』京都市参事会，1895年
- 4) 京都府立歴彩館所蔵「朱雀日記」原稿（「吉井勇資料」文章番号2398）
連載通し番号 枚数（歴彩館資料通し番号）
 - 6 ジレットタント 松屋製400字詰原稿用紙 4枚 ペン（1,2,3,4）
 - 7 瓢亭と中村屋 松屋製400字詰原稿用紙 4枚 毛筆（5,6,7,8）
 - 9 嵯峨野 神楽坂山田製400字詰原稿用紙半切 7枚 ペン（9,10,11,12,13,14,15）
 - 10 嵯峨野 松屋製400字詰原稿用紙半切 6枚（16,17,18,19,20,21）および
松屋製400字詰原稿用紙 1枚 ペン（22）
 - 11 嵯峨野 松屋製400字詰原稿用紙 3枚 毛筆（23,24,25）
 - 12 加茂川 松屋製400字詰原稿用紙 3枚 ペン（26,27,28）
 - 13 大極殿趾 松屋製400字詰原稿用紙 5枚 ペン（29,30,31,35,36）
 - 14 鳳凰堂 松屋製400字詰原稿用紙 3枚 ペン（32,33,34）
 - 16 嶋原 松屋製400字詰原稿用紙 3枚 ペン（37,38,39）
 - 17 嶋原 松屋製400字詰原稿用紙 3枚 ペン（40,41,43）
 - 18 島原 松屋製400字詰原稿用紙 3枚 ペン（42,44,45）
- 5) 千葉俊二・明里千章「解題」、『谷崎潤一郎全集』第一巻，中央公論新社，2015年，546頁
- 6) 全集421-423頁該当。
- 7) 全集422頁
- 8) 「大阪毎日新聞」1912年5月17日
- 9) 現行全集版の「朱雀日記」には、本文中に指摘した他にも誤りといってよい箇所がある。それらを表3に示す。

「朱雀日記」は初出翌年に刊行された単行本『悪魔』（1913年1月，叢山書店）に収録され、

表3 「朱雀日記」現行全集版誤記の校異

	1	2	3	4	5
現行全集表記 頁行	平安神社 405頁-5行	栢に 416頁-2行	三百六十丈 422頁6行	搏風【はくふう】 423頁-7行	櫛間【みけん】 425頁4行
新書判自撰全集	平安神社	栢に	三百六十丈	搏風【はくふう】	櫛間【みけん】
隨筆選集	平安神社	栢は	三百六十丈	搏風【はくふう】	櫛間【みけん】
『京の夢大坂の夢』	平安神社	栢は	三百六十丈	搏風【はくふう】	櫛間【みけん】
改造社版全集	平安神社 【へいあんじんじや】	栢【こずゑ】に	三百六十丈 【さんびやくろくじふちやう】	搏風【はくふう】	櫛間【みけん】
『芸術一家言』	平安神社	栢は	三百六十丈	搏風	櫛間
傑作全集	平安神社	栢は	三百六十丈	搏風	櫛間
『天鷲絨の夢』	平安神社	栢は	三百六十丈	搏風	櫛間
『悪魔』	平安神社 【へいあんじんじやう】	栢【こずゑ】は	三百六十丈 【さんびやくろくじふちやう】	搏風【はふ】	櫛間【びかん】
初出紙	平安神社	栢【こずゑ】は	三百八十丈【ぜう】	破風【はふう】	櫛間【びかん】
原稿	原稿不在	栢【こずゑ】は	三百八十丈	破風【はふう】	原稿不在

[] 内はルビ

「朱雀日記」と『京都名勝記』（藤原）

谷崎存命中に『天鷲絨の夢』（1920年6月、天佑社）、『潤一郎傑作全集』第三卷（1921年9月、春陽堂）、『藝術一家言』（1924年10月、金星堂）、『谷崎潤一郎全集』第一二卷（1931年10月、改造社）、『京の夢大阪の夢』（1950年4月、日本交通公社出版部）、『谷崎潤一郎随筆選集』第二卷（1951年7月、創藝社）、『谷崎潤一郎全集』第一四卷（新書判自撰全集、1959年7月、中央公論社）に再録されている。

谷崎没後に刊行された愛読愛蔵版全集（1981年5月、中央公論社）は新書判自撰全集を踏襲し、現行全集は愛読愛蔵版全集を底本としているため、原稿、初出紙、『悪魔』以降新書判自撰全集までの校異を調べた。いずれも、原稿及び初出誌の記載が正しいものである。

表中の2は京都嵐山にある落柿舎の命名の由来となったエピソードを詠んだ句の引用である。「柿ぬしや梢は近きあらし山」の中七の助詞が「に」になると、梢は嵐山の位置を示す参照点になってしまう。それでは「あらし山」に句の主眼があることとなり、梢に実った柿が一夜にして嵐のような風で落ちてしまったことを自嘲しつつ、その経緯を踏まえて「落柿舎」と号して詠んだ俳味は薄れてしまう。一字の誤りとはいえ一七文字の俳句の引用としては、文学全集とすればいささか慎重さに欠けている。

4および5は平等院鳳凰堂の記述で使用された建築用語にあやまったルビが振られた例である。「搏風」は「はふ」と読み、今日では「破風」と表記することが多い。唐破風や千鳥破風のように使われる「破風」のことである。

「楣間」は「びかん」と読み、「長押の間。欄間の間」（小学館国語辞典編集部『精選版日本国語大辞典』電子版、2016）のことで、日本建築内部の、長押あるいは欄間の間、あるいはそれらから天井までの間の壁面を指す用語である。参考までに記せば、谷崎の小説「二人の稚児」（1918年）には、「楣間を飛騰する天人の群像」とあり、「びかん」と正しくルビが振られている用例もある（『谷崎潤一郎全集』第五卷、中央公論新社、2016年、15頁）。

これらの校異から判断すれば、新書判全集は、改造社版全集を底本としている可能性が高い。改造社版全集は総ルビのため、やや専門的なこれらの語にまで注意が行き届かなかったのかもしれない。しかしながら、去来の落柿舎の句の助詞の誤りもこの全集に始まるので、丁寧な編集作業が行なわれたとは言い難い。この程度のミスは諒とすべきともいえようが、去来の句や大内裏の規模の誤記は谷崎の記述の信頼性を大きく毀損していることは間違いないのだから、ここに指摘しておく。

- 10) 若松雅太郎著発行『平安遷都千百年紀年祭協賛誌』蒼龍編、1896年、73丁裏
- 11) 「日出新聞」1896年6月16日1面
- 12) 黒板勝美編『日本紀略 前編』新訂増補国史大系第十卷、吉川弘文館、2000年、268頁および佐伯有義編『増補六国史』巻六（日本後紀巻下）、朝日新聞社、1941年、18頁
- 13) 黒板勝美編『日本紀略 前編』新訂増補国史大系第十卷、吉川弘文館、2000年、268頁、佐伯有義編『増補六国史』巻六（日本後紀巻下）、朝日新聞社、1941年、17頁、および黒板勝美編『類聚国史 前編』新訂増補国史大系第五卷、吉川弘文館、1999年、414頁
- 14) 小学館国語辞典編集部『精選版日本国語大辞典』電子版、2006年
- 15) 『京都名勝記』、凡例
- 16) 『京都名勝記』凡例には「本書は今明治三十六年政府第五回内国勧業博覧会を大阪に開設し、我市も同時に施設する処ありて内外の来遊者多かるべきを以て、市の事業として之を編纂するに決したる」とある。
- 17) 『京都名勝記』上、17頁

- 18) 『京華要誌』凡例
- 19) 井上章一『つくられた桂離宮神話』弘文堂, 1986年, 191頁
- 20) 京都市参事会著発行『平安通志』巻一, 1895年, 3丁裏
- 21) 『平安通志』巻一, 9丁表
- 22) 『平安通志』巻三, 1丁表
- 23) 「朱雀日記」, 全集 422頁
- 24) 京都市参事会編発行『平安遷都紀年祭記事』上, 1896年, 106丁裏
- 25) 京都市参事会編発行『平安遷都紀年祭記事』上, 1896年, 99丁裏—100丁表
- 26) 編纂を委託された時は「平安通志ノ事業正ニ煩忙ナル上更ニ京華要志ノ編纂ヲ加ヘ益々煩雜ヲ極ムルノミナラス其材料ニ雍実ノモノ乏シク諸社寺其他ニ問合スモ充分ノ取調ヲ得ス且名勝旧蹟等ニ係ル書籍ハ已ニ数十年前ノモノニシテ維新ノ變更ヲ經其盛衰廢興一ナラス一々実地ニツキ探窮スヘキモ其暇ヲ得ス」とある。(京都市参事会編発行『平安遷都紀年祭記事』上, 1896年, 100丁表)
- 27) 「編纂日月之短迫不免繁簡不一於宝什其他記述猶有欠如蓋名勝之饒多記事之繁浩不可一朝而求大成亦不得已也〔略〕新命史員以期大成」(内貴甚三郎「京都名勝記序」, 『京都名勝記』上)
- 28) たとえば, 小林丈広「『平安通志』の編纂と湯本文彦 十九世紀末京都における「知」の交錯」(明治維新史学会『明治維新と歴史意識』吉川弘文館, 2005年, 109-144頁)では, 『平安通志』編纂組織の分析を通じて, 同書の地方史誌と近代京都史上の意義を明らかにしている。
- 29) 『京都名勝記』上, 凡例
- 30) 『世継物語』, 『続群書類従第三二輯下雑部』続群書類従完成会, 1988年, 164-166頁
- 31) 『雍州府志』巻九, 『新修京都叢書』第十巻, 1968年, 671-672頁
- 32) 内貴甚三郎「京都名勝記序」, 『京都名勝記』上
- 33) 『山城名勝志』巻之五「羅城門」, 『新修京都叢書』第一三巻, 1970年, 256-257頁
- 34) 浅見和彦校注訳『十訓抄』, 新編日本古典文学全集五一, 小学館, 1997年, 530頁
- 35) 浅見和彦校注訳『十訓抄』, 新編日本古典文学全集五一, 小学館, 1997年, 394頁
- 36) 黒木香「都良香像の変質と「天神縁起」——鬼の付句をめぐって」, 『国文学攷』104号, 広島大学国語国文学会, 1984年, 10-19頁
- 37) 『都名所図会』, 新修京都叢書第六巻, 臨川書店, 1967年, 186頁
- 38) 『梅城録』, 『群書類従第二輯神祇部』続群書類従完成会, 1983年, 178-179頁
- 39) 『京華要誌』, 「凡例」
- 40) 小島孝之・浅見和彦編『撰集抄』桜楓社, 1985年, 209頁
- 41) 小島孝之・浅見和彦編『撰集抄』桜楓社, 1985年, 209頁頭注 23
- 42) 註 27) 参照。
- 43) 久保木秀夫『中古中世散佚歌集研究』青簡舎, 2009年, 158頁
- 44) 刊本『歌枕名寄』解説, 吉田幸一・神作光一・橘りつ編『歌枕名寄』八, 1976年, 311頁
- 45) 吉田幸一・神作光一・橘りつ編『歌枕名寄』二, 1974年, 41頁および久保木秀夫『中古中世散佚歌集研究』青簡舎, 2009年, 192頁
- 46) 『都名所図会』, 新修京都叢書第六巻, 臨川書店, 1967年, 30頁
- 47) 『都名所図会』, 新修京都叢書第六巻, 臨川書店, 1967年, 29頁
- 48) 『都名所図会』, 新修京都叢書第六巻, 臨川書店, 1967年, 29頁
- 49) 井上章一『つくられた桂離宮神話』弘文堂, 1986年, 190頁および194頁

「朱雀日記」と『京都名勝記』（藤原）

- 50) 「新命史員以期大成拮据勤精十有六月而終功題曰京都名勝記」, 内貴甚三郎「京都名勝記序」, 『京都名勝記』上
- 51) たとえば永井一考校訂『平家物語』（有朋堂書店, 1910年, 4頁）では、「打着」を「袿」と、「只独」を「唯独」と表記している。
- 52) 「劍の巻」のこの箇所は次のようなものである。「一條堀川の戻橋を渡りける時、東のつめに、齡二十餘と見えたる女の、膚は雪の如くにて、誠に姿幽なりけるが、紅梅の袿に守懸け、佩帯の袖に経持ちて、人も具せず、唯独南へ向ひてぞ行きける。〔略〕綱は近く歩み寄て、女房をかき抱きて、馬に打ち乗せて、堀川の東のつめを南の方へ行きけるに、正親町へ、今一二段が程、打も出でぬ所にて、此女房後へ見むきて申しけるは、誠には五條わたりには、さしたる用も候はず、我住所（すみか）は都の外にて候ふなり、それまで送りて給ひなんやと申しければ、承候ひぬ、何処までも御産所（おはしましどころ）へ、送り進（まゐ）らせ候ふべしといふを聞きて、頓（やが）て厳しかりし姿を替へて、怖しげなる鬼に成りて、いざ我行く所は、愛宕山ぞといふまゝに、綱が鬘を提げて、乾の方へぞ飛び行きける。綱は少しもさわがず、件の鬘切をさつと抜き、空ごまに鬼が手をふつと切る。綱は北野の社の、廻廊の屋の上にとつと落つ。鬼は手を切られながら、愛宕へぞ飛行く。」（永井一考校訂『平家物語』有朋堂書店, 1910年, 4-5頁, 括弧内はルビ）
- 53) 黙阿弥の「戻橋」「茨城」については河竹糸女補修・河竹繁俊校訂編纂『黙阿弥脚本集』第二五巻, 春陽堂, 1923年, 参照。謡曲「羅生門」については、芳賀矢一校訂『謡曲二十番』袖珍名著文庫, 富山房, 1903年, 参照。また巖谷小波「日本昔噺」第十五編「羅生門」については、巖谷小波（上田信道校訂）『日本昔噺』平凡社東洋文庫, 2001年を参照した。御伽草子の「羅生門」については、島津久基編市古貞次校訂『続お伽草子』岩波文庫, 1956年を参照した。
- 54) 本文 148-149 頁参照。
- 55) 大極殿の建築を記した条には次のようにある。
「南北四間五楹、楹間各一丈三尺合五丈五尺東西十一間十二楹、楹間各一丈六尺、合十七丈六尺内部楹ヲ建ル一重其中央ヲ宸座トス総テ五十二楹前面戸ナシ其東西及ヒ廊及ヒ階に接スル所戸アリ丹腹粉壁其構造ノ詳細今考ふる所ナシ」（『平安通志』卷三、二丁表）
- 56) 「こほちきは。宮こうつりの日近く成てえあはせし。さらはせてあるはかり」（『世継物語』, 『続群書類従第三二輯下雑部』続群書類従完成会, 1988年, 165頁）
- 57) 全集 405 頁
- 58) 「平安神宮は岡崎町に鎮座し、祭神は桓武天皇にして官幣大社とす。明治二十八年京都市に於て桓武天皇平安遷都一千一百年祭を挙行せんとするや、全天皇が千歳不易の帝都を平安城に奠し玉ひし宏謨偉略を追慕尊崇し、殿社を創建して以て神霊を奉祭し、また全天皇の平安京造営に当り最も大御心を留め玉ひし大極殿並に応天門を模造し、以て宏壯華麗の觀を添へんと欲し、〔略〕華麗莊嚴の神殿樓門は、巍々燦々として東山の翠微と相輝映し、京洛の一偉觀を添るに至りぬ。
〔略〕
大極殿 南向、桁行百十尺、梁間四十尺あり、高さ五十五尺にして土壇の上に建つ。中央を身舎とし、之を周りて入側あり、五十二の丹楹整然として列る。天井は板を用ひす、凡て楕円形の化粧垂木を露出せり。土壇は高五尺、東西百二十八尺、南北五十八尺あり、周囲に朱欄を設け、南北両面に各三箇の石階あり。全部丹朱を以て塗り、裏甲垂木の木口等は黄土を用ひ、屋

- は鮮麗なる碧瓦にして、棟の両端には金銅の鴟尾燦爛として耀く。』（『京都名勝記』中1-2頁）
- 59) 全集 415 頁
- 60) 「天龍寺
靈龜山天龍資聖禪寺と号す、〔略〕曆応二年足利尊氏後醍醐天皇追福の為に大道場を創出し、貞和初年に落成し、夢窓国師を請し開祖とし勅願に準せらる。其天龍と号せしは、当時金龍此地に現はれし瑞あるに因るといふ。古昔は殿堂門楼莊嚴偉麗を極めしか、爾來幾度の兵乱に回祿し、近年また元治の劫火に罹り法堂等一空せしが、峨山和尚之が再建を企て、明治二十七年工を起し、全三十三年に至り本殿、法堂、其他悉く落成し、巍然たる旧觀に復せり。」（『京都名勝記』中192頁）
- 61) 「天台、律、法相、浄土、四宗兼学の巨刹で、承和年中創建の東寺から応仁の兵燹の折迄、度々の栄枯盛衰に遭ひ、現存の本堂は永正享祿の頃、広明和尚が十方を勧化して再建したものである。」（『朱雀日記』、全集 417 頁）
「二尊院
小倉山と号し、天台、律、法相、浄土四宗兼学にして、現今妙法院に属せり。寺伝に曰く、承和年中慈覚大師嵯峨上皇の勅を奉じ、此地に於て堂宇を創建し、春日仏師をして発遣釈迦、来迎弥陀二像を彫刻せしめ之に安置す、故に二尊教院といふ、また華台寺と称す。と、されど年代悠久にして詳ならず。爾來数百年大に荒廢せしが、法然上人此靈境を愛して閑棲を占め、藤原兼実（兼実）の力を借りて中興の運を開き、二世湛空上人土御門、後嵯峨両天皇の戒師となりて大に諸堂を营造し、四世正覚上人また後深草、龜山、後宇多、伏見四朝の戒師となり、ますます之を増建せり。其後又々衰頹し、足利義教の時に重修せしが、応仁の兵火に罹りて一空なす。永正享祿の間、広明和尚十方を勧化して之を再建し、現存の本堂等は此時に営む処なり。」（『京都名勝記』中182-183頁）
- 62) 全集 406 頁
- 63) 全集 405 頁
- 64) 「金色の死」、谷崎潤一郎全集第3巻、202頁、初出；「東京朝日新聞」大正3年12月
- 65) 同上
- 66) 「鶯姫」、谷崎潤一郎全集第4巻、288頁

要 旨

『朱雀日記』は谷崎潤一郎(1886-1965)の京都訪問記である。1912年4月から5月にかけて「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」に19回にわたって連載された。本稿は、その執筆に際して、谷崎が『京都名勝記』を参照したことを考証するものである。

京都府立京都学・歴史館には「朱雀日記」の手稿が所蔵されている。その中から連載第13回「大極殿趾」全文を翻刻し、掲載する。同回では、大極殿旧趾、羅城門旧址、一条戻橋などが紹介されている。それらの名所旧蹟について、1894年から1911年に刊行された京都案内書38冊を調査した結果、『京都名勝記』を参照したことを特定した。

特定するための論拠となった一例をあげると、「朱雀日記」では戻橋に関連して、『平家物語』「剣の巻」を引用しているが、内容に誤りがあり谷崎はその物語自体は読んでいなかったにも関わらず、全く同一の一節が『京都名勝記』にも引用されていること、さらに、戻橋の紹介で「剣の巻」に言及している案内書は同書以外にないこと等から導かれた結論である。

『京都名勝記』は京都市参事会編で1903年4月に上中下三巻で刊行された京都の案内書である。皇宮など皇室関連の記述は1895年の平安奠都千百年祭にあわせて刊行された『京華要誌』を踏襲しながらも、名所旧蹟については関連する古典文学や説話を広く紹介するなど、より一般向けに改訂し編集されたものである。

谷崎は『京都名勝記』の複数の項目を再構成するかのようになり、遷都当初の平安京イメージを「朱雀日記」で表現したが、その際に用いた対句や修飾語は、「金色の死」(1914)や「鶯姫」(1917)など、後年の作品にも用いられている。それらは芸術的理想郷を表現する場合に用いられており、『京都名勝記』が1910年代の谷崎に及ぼした影響は無視しえないものといえる。

キーワード：谷崎潤一郎 朱雀日記 京都 ガイドブック 京都名勝記

Abstract

"Diary of SUZAKU (Suzaku Nikki) " by Jun'ichiro TANIZAKI (1886-1965) is a diary of his first visit to Kyoto. From April to May 1912, it was serialized over 19 issues in major newspapers in Tokyo and Osaka. This paper examines the fact that Tanizaki referred to "Kyoto Meishou Ki" for writing it.

A full text of the 13th issue in the series will be reprinted from the original manuscript of "Diary of SUZAKU", which belongs to "Kyoto Institute, Library and Archives"

Tanizaki introduced the historical sites of Daigokuden and Rajomon and Modoribashi in it.

After the inspection of 38 guidebooks on Kyoto published between 1894 and 1911, we identified that "Kyoto Meishou Ki (1903) " was the reference Tanizaki used.

In "Diary of SUZAKU", Tanizaki expressed the image of Heiankyo at the time of the relocation of the capital with descriptions which closely refer to the "Kyoto Meishou Ki".

The couplets and modifiers in it were also used in his later "Konjiki no Shi" (1914) and "Uguisu Hime" (1917) to express a character's dreaming utopia. "Kyoto Meishou Ki" has played a great influence in Tanizaki's writings in the 1910s.

Keywords : Jun'ichiro TANIZAKI, Diary of SUZAKU, Kyoto, Guidebook, Kyoto Meishou Ki